

deutsch の起源——研究の現況と課題 (下)*

三佐川亮宏

はじめに

一章 前提と問題の所在

一節 語源

二節 語義

三節 語彙史

二章 * *theudisk* か *theodiscus* か?

一節 二重母音、異形表記、接尾辞 *-isk*

二節 音韻法則に例外なし?

三節 「オトフリート問題」—— *theodisce, francisce, frenhisc*

(以上前号)

三章 * *theudisk/theodiscus/diutisk*——語形成をめぐる言語史的・

歴史学的議論

(以下本号)

一節 「共通ゲルマン語」か「西ゲルマン語」か

二節 「ヴァイスゲルバー」「西方言語境界説」

三節 「西方言語境界説」批判と「東方の語 *diutisk*」

四節 トーマス「カール大帝とイタリア」

五節 現況——「イタリア起源説」

結びに代えて

三章 * *theudisk/theodiscus/diutisk*

——語形成をめぐる言語史的・歴史学的議論

一節 「共通ゲルマン語」か「西ゲルマン語」か

二章では、主に語源論の観点からゲルマニスト・言語学者による

議論の現状を紹介・整理した。本章は、* *theudisk, theodiscus*、そ

して *diutisk* という三者の系譜関係をめぐる問題を、語形成という

歴史学の領分とも密接に重なり合う視点から、研究史の展開に即し

てまとめてみたい。

仮説 a の論者は、ラテン語 *theodiscus* に先行して * *theudisk* が存

在したことを前提とする点では完全に意見が一致している。ところ

が、それでは**theudisk*はゲルマン語派に属する諸言語の中のいかなる言語において造語されたのか、という問題になると、見解が分かれてくる⁽⁸³⁾(図2を参照)。ゲルマン語派の分類は、ここでは最も一般的な地域的分類法に拠った)。

研究史のスタートに位置するグリムは、当時知られていた史料をくまなく渉猟したうえで、この語は、古高ドイツ語に限らず、ゲルマン系諸言語が用いられた諸民族の間に広く存在した「共通ゲルマン語 (Gemeingermanisch)」であると考えた⁽⁸⁴⁾(二八四〇年)。その重要な証拠の一つとされたのは、四世紀のゴート人、ウルフィラ(三二一年頃—八三年頃)の手になるゴート語訳聖書に見出される副詞*biudisko*である。「もしあなたがユダヤ人 (*Iudais*) でありながら異邦人のように (*biudisko*) 生き、ユダヤ人のように (*iudainisko*) 「生きているの」でないなら、どうしてあなたは異邦人たち (*biudos*) に、ユダヤ人となることを強要するのか⁽⁸⁵⁾ (*Jabai pu Iudais wisands biudisko hbais jah ni iudainisko, haina biudos baidais iudainiskom?*)」(ガラテア人への手紙、二・一四)。グリムは、ウルフィラが翻訳に用いた副詞(形容詞形は*biudisks*)は、ゴート人の間で既に広く普及していた語であったと推定した。しかし、その後のこの見方は歴史学者のドーヴェによって斥けられることになる(一八九三年)。

ギリシア語の *ἑθνεῶν* の訳語である *biudisko* は、ドーヴェによれば、本来ゴート語には存在しなかった。それは、同じ文章中に見

える「*Iudais* ユダヤ人」→「*iudainisko* ユダヤ人のように」からの類推形成によって、名詞「*biuda* エトノス 民族」の複数形「*biudos* 異邦人たち」を基にまったく新たに造られた:「*biudos* 異邦人たち」→「*biudisko* 異邦人のように」。つまり、*biudisko* は、あくまでも知識人による翻訳を目的とした *ad hoc* な造語の所産なのであって、「*deutsch* の起源」に直接関わる史料とは位置づけられない、というのである⁽⁸⁶⁾。ドーヴェの解釈は学界で受け容れられ、ウルフィラの *biudisko* は、その後一世紀の間議論の俎上に上ることはなかった。グリムは、「共通ゲルマン語」説を支える新たな史料の発見を期待していたようだが、今日にいたるまで**theudisk* は、北ゲルマン語・東ゲルマン語のいずれにおいても確認されていない。

ただし、古高ドイツ語と同じく西ゲルマン語に分類される古英語には、九世紀末に *beodisc* という語が存在したことが知られている。それは、アルフレッド大王(八四八—九九年)によるボエティウス『哲学の慰め』の古英語散文訳の中に見出され、問題の語は、『哲学の慰め』の「たとえ名声が遠く離れた諸民族まで広まって／多くの言葉で賞賛されようとも (*Licet remotos fama per populos means / Diffusa linguas explicit*)」(第二部、第七韻文)に対応する箇所に見れる。 *beah hit nu gebryge þa utemestan ðioda eowerne naman up ahebban <and> on manig beodisc eow herigen...* [Though it should happen that the uttermost nations were to

exalt your name, and praise you in many a tongue...」。(87) の *beodisc* は名詞形で、「(諸民族の) 言葉 *linguae*」を意味している。(88) *on manig beodisc* が具体的には「ハレルの塔」の建設によってもたらされた言語の混乱として理解されていることは、原テキストにはないアルフレッドによる補足から明らかとなる。*hiora spæc is todeled on hwa <and> on hundseofonig, <and> ælc þara spreca is todeled on manega bioda...* [their speech is divided into two and seventy tongues, and each tongue is further parted out among many peoples...]。注目されるのは、*beodisc* と同様 *bioda* (<*geþeode*>) もまた、「(諸民族の) 言葉」を意味していることである。ほぼ同じ表現が三五章にもあるが、そこでは *bioda* の代わりに *geþeode* (<*geþeode*>) が用いられている。(89) なお、上述 *on manig beodisc* の語法は、やはりアルフレッドによると推定される『哲学の慰め』の韻文訳に転用されている。(90) *þeah eow nu gesæle þ eow swð oððe nord/þa ymestan eorðbunde/on manig ðiodisc miclum herien,...* [Though it befell that southward and north/The uttermost denizens, dwellers of earth, / In many a tongue intoned your praises: ...]

古英語の *beodisc* が研究者の注目を引いたのは、グリムの共通ゲルマン語説の故というよりは、むしろラテン語の *theodiscus* の初出用例との関連が憶測されたからである。すなわち、七八六年にイングランドで開催された教会会議に関する報告書簡中で、*theodis-*

ce は、まさにアングロ・サクソン語をラテン語との対比させつつ指称していたのである(本稿序章、後述四節)。

例えば、上述のドローヴェは、*theodiscus* の起源を、アングロ・サクソン人のボニアティウス(六七二/七三年頃—七五四年)と弟子たちの、フランク王国を舞台とするキリスト教伝道活動の中に探ろうと試みた。「ゲルマニアの使徒」は、外部からの包括的視点、および長年の布教経験を通じて、なお異教に留まるライン以東の諸民族 (*gentes*) が用いるゲルマン語系諸言語を、「教会の言葉」としてのラテン語との対比関係において一体視するにいたり、その総称の意味で *theodiscus* を用いたのではないかと。(90)

その際、ドローヴェは、*theodiscus* の基になったのは、あくまでも大陸の「ドイツ語 (*in deutscher zunge*)」の中に既に長らく存在していた **theodisk* であると考えていた。この部分は、一九一八年、ゲルマニステイークの側から古英語の専門家でもあるブラウネによって修正された。「ドイツ・フォルクの中にその語は、まだ浸透してはいなかった」。ブラウネによれば、アングロ・サクソン人は大陸の地で、故郷の古英語の名詞 *beod* を基に独自に *beodisc* を造ったというのである。確かに、古英語の *beodisc* の用例は極めて限られている。しかし、名詞 *beod* から派生し、やはり「言葉」を意味する *geþeode* は広く用いられていた。それ故、*geþeode* を基に、*beod* と接尾辞 *-isc* を組み合わせると同じ語義の語、つまり「*Beodisc* 言葉」を作ることには容易にできたはずだといふ。(91)

この「アングロサクソン起源説」は、二つの重要な論点を提示している。一つは、外部（＝アングロサクソン人）ないし他者（＝キリスト教徒）の観点から理解された「他称」という視座の設定である。言い換えると、「ドイツ」なる固有辞概念の生成は、グリームとは対照的に、広範な「フオルク」の世界ではなく、（キリスト教）知識人の手に求められることになる。もう一点は、ブラウネが **theudo* 系列の *beod/gebeode*, *beodisc* という名詞形が「フオルク」からの転義として、「（フオルクの）言葉」という語義へと展開しうる可能性を、古英語に関して立証したことである。

もちろん、こうした事例は、他の西ゲルマン語では確認されていない⁽⁹²⁾。副詞的語法にしても、かのオトフリートが一度だけ用いた *gihini*（二章三節）や、『アプロガンス』（八世紀半ば）の *-cunin* が僅かに知られているにすぎない⁽⁹³⁾。さらに、*beodisc* は、ウルフィラの語法と同様、古英語においても「異教徒」を意味しえたことにも留意する必要がある。アルトヘルム（六四〇年頃―七〇九年）の（散文版）『貞潔論』（*De virginitate*）の一一世紀末の写本では、ラテン語の「*gentiles* 異教徒」に対する語義注釈で *beodisce* が付されている⁽⁹⁴⁾。実際、伝道的文脈の中にラテン語形容詞の造語動機を求めるドゥヴェの解釈は、*theodiscus* が「異教徒の（言葉）」という語義を内包してしまう可能性を示唆している。しかしながら、*theodiscus* と「異教徒の（言葉）」との間には確かに間接的な接点があるが、*theodiscus* にこうした含意は確認されないのである⁽⁹⁵⁾（一

章二節）。

これら二つの論点については、四・五節で立ち戻ることとする。ともあれ、研究史において「アングロサクソン起源説」は、それを裏付ける史料の少なさや、次に紹介する「西方言語境界説」の陰に押しやられ、その後立ち上った検証が加えられることがなかった。また、ゴート語の *Þiudisko* にも妥当することだが、多くの研究者が「*deutsch* の起源」を、「ドイツ」の内部における「自称」用法に求めることを心情的に欲したという事情も、その軽視に影響していたと思われる。次に、その最も典型的な解釈に目を向けてみよう。

二節 ヴァイスゲルバー「西方言語境界説」

グリムの研究が刊行されてから正確に一世紀後の一九四〇年、ケルト学者・言語学者のヴァイスゲルバーは、混迷状況に陥っていた論争⁽⁹⁶⁾に終止符を打つべく、「*Þeudisk*—ドイツ人の民族名と西方の言語境界」を発表した。彼は、基本的に仮説 a の立場に支持する。ただし、*deutsch* の形成を単一ではなく複合的に、すなわち、一、フランク人の自己省察の語としての **theudisk*（七〇〇年頃）、二、ゲルマン系諸部族間における言語的共通性の徴としての *theodiscus*（八〇〇年頃）、そして、三、ドイツ人という民族共同体意識の表明の証としての *Þiudisk*（九〇〇年頃）、という「三重の根源（*Wurzeln*）」から説明する点が特徴的である。以下の紹介においては、彼の所説の中心をなし、また最も激しく議論された第一の根源を対象

を絞ることとする。⁽⁹⁷⁾

一、ヴァイスゲルバーの出発点となるのは、* *theudisk* は言語分類上、西ゲルマン語中の「西フランク語」に限定され、この語は特定の歴史的状況下で造語されたという前提である。その論拠とされるのは、この方言が示す音韻の特殊性、初期の *theudiscus* の用例の西方への集中、そしてとりわけメロヴィング王国の中核地帯である北ガリア地方の言語・民族状況である。

ヴァイスゲルバーによれば、フランク人による土地占取 (*Landnahme*) の結果、五〇〇〜七〇〇年頃、ライン・ロワール間の地域は、征服者によってもたらされたゲルマン語系フランク語と、被征服者のガロ・ローマ系住民に固有のロマンス語という二つの言語が混交する状況にあった。当初はゲルマン的要素が圧倒的に優勢を誇っていたが、メロヴィング王権の衰退による混乱の中で、「ローマ側の反撃」が政治・行政・法制度といった多くの分野、中でもとりわけ言語において始まった。特に両言語がせめぎ合う境界域の西側では、七世紀になるとフランク人のロマンス語化 (*Verwelschung*) が著しく進行し、彼らは、民族としてのアイデンティティの喪失の危機に瀕していた。これら二つの要素の間の緊張関係の高まりは、*Franci* (フランク人)、*Franciscus* (フランクの) という概念内容にも重大な影響を及ぼさずにはおかなかった。この語は、ゲルマン系征服者を指す本来の民族的概念から、台頭しつつあるガロ・ローマ系の有力者をも含めた支配階層全般を表す政治的・法的

概念へと変容していったのである。そこで、「フランク」に代わって、国土・民族・言語といった民族の固有の価値全般を表記する新たな語が今や必要となった、というのである。

* *theudisk* は七〇〇年頃、こうした二言語混交地域における民族闘争において、「境界をめぐる戦いの言葉」として登場した。その語義は、「我々の *theuda* に属する」であり、*theuda* の中核をなすのは「部族的 (*stammhaft*) な共属性」であった。⁽⁹⁸⁾ この形容詞は、国土・民族などを指称することも可能であったが、上述の理由から最も明瞭に民族の相違を意識させる要素である言語を、具体的には「ロマンス語化されていないフランク人 (*die unverwelschten Franken*)」が用いた (本来のゲルマン語系の) 「フランク語」を、まず第一に指称したのである。「ドイツという言語名はある意味で、後に確定されることになる言語境界線の向こう側 (西側) に住み、今やロマンス語化される運命に置かれていたフランク人が、故郷へ向けて発した叫び声 (*Heimatruf*) であつた。それは、このもはやほとんど逃れることのできない運命を引き止め、反転させようとする努力から発せられたのである」。⁽⁹⁹⁾

二、* *theudisk*——正確には * *theudisk*——は、八〇〇年頃、カール大帝周辺の書記局や知識人によってラテン語化され、*theudiscus* という語を生み出した。その目的は、「帝国のゲルマン人領域に固有な文化的価値を育成し、広めること」⁽¹⁰⁰⁾ にあつた。カールは、政治的・軍事的にフランク帝国に統合されたゲルマン系諸部族を、内的

にも一体化させることを目指し、彼らに共通の母語である *lingua theodisca* を絆として結ばれた言語共同体意識の強化を図ったのである。そのため、この語が指示対象とする範囲は、基本的にこれら諸部族の言語に限定された。

三、その後、帝国の分裂によって成立した東フランク王国は、主にこれらゲルマン系諸部族から構成されており、ここでは九世紀半ば以降民族共同体としての共属意識が覚醒しつつあった。こうした言語・民族意識は、九〇〇年頃、既にそれ以前から存在していた古高ドイツ語の *diutisk* が *theodiscus* の影響下について「deutsch」ドイツ(語)の「という固有辞の語義を帯びるにいたったことにおいて、その最終的な自己表現を見出したのである(図3を参照)。

ところで、ヴァイスゲルバーが **theudisk* の故郷を特定する論拠の一つとしたのは、先に詳述した二重母音の問題である(二章一節)。彼は、**theudisk* > **theodisk* という図式を構想し、後者のラテン語化により *theodiscus* という形が与えられたと考えたが、*-eu- > -eo-* の関係は音韻法則上成立し難い。そこで、探し求められたのが、西ゲルマン語系諸語の中にあつて、*-eu-* から *-ie-* へのウムラウト変化を知らず、*-eu-* とともに *-eo-* という二重母音形が並存可能な特殊な方言であつた。もつとも、彼が見出した方言——「西フランク語 (Westfränkisch)」——は、フランク西方のロマンス語圏で九世紀に消滅し、史料にその痕跡を極めて僅かしか留めていない。

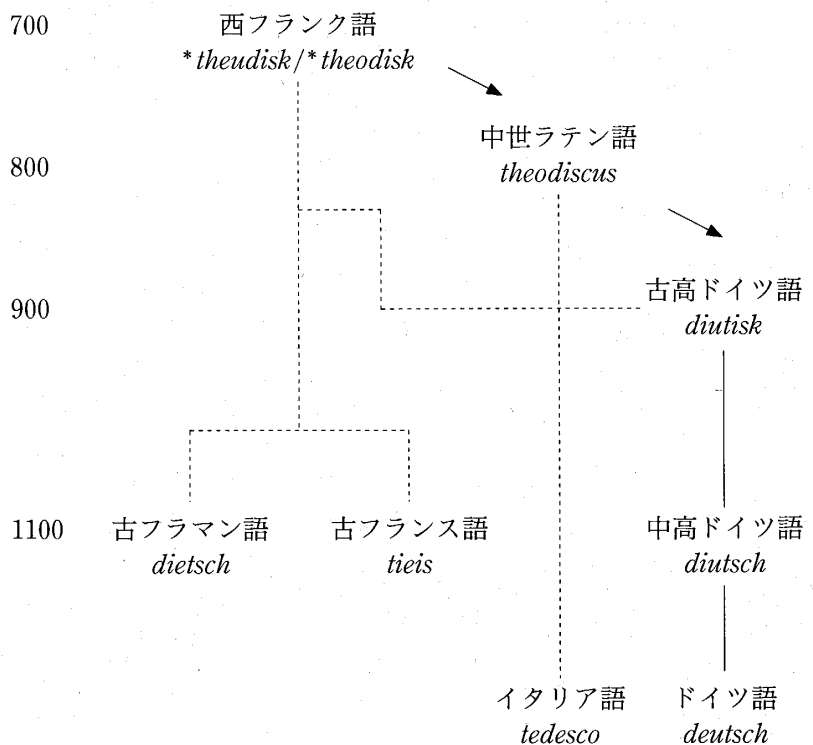


図3

ヴァイスゲルバーの立論において引証されたのも、中世初期の同時代史料ではなく、五世紀も後の一一〇〇年頃に成立した『ローランの歌』(V.3795)に初出する古フランス語の *ties/Tiedeis* であつた(註10)。この部分についての論証は、自身も認めるようになお不十分な点を残したままだったのである。

この「決して重大ではないものの、最後に残された隙間」を埋め

合わせるべく、側面から援護の手を差し伸べたのが、これまでしばしばその名を挙げてきたフリングスである(二九四一年)。彼は、中世盛期ニードラントの史料を広く引証しつつ、古フランス語に伝えられている *his* がフラマン＝ブラバント語の *dietsch* (二章一節)と関連していることを立証しようと努めた。また、**theudisk*/*theodisk* が形成された地域についても、ヴァイスゲルバーは北ガリア地方としていたが、より厳密に「最も危機的状況にあった七世紀のシェルデ川地方」に特定できるとした。

フリングスによれば、その後、この語は、「境界闘争がカロリング期まで継続する中で、それまで脅威に曝されていた西方のゲルマン人領域を大きく踏み出して」、東方へと向かっていった。「それ(「**theudisk*)は、境界闘争、境界意識の次元から、ドイツ諸部族の上位に位置するドイツ的統一体こそが一個のドイツ民族であるという意識へと到達した。かつての、故郷へ向けての叫び声(Heimatruf)は、小規模の戦争から政治の高みに向けて響きわたることになったのである」。

三節 「西方言語境界説」批判と「東方の語 *diutisk*」

ヴァイスゲルバーの研究は、発表後直ちにセンセーショナルな反響を呼び起こした。フリングスやノイマンといった錚々たるゲルマニストが全面的に支持したのに対し、ロマニストのレルヒは、仮説bの立場から厳しい批判を浴びせ、また同じゲルマニストの中でも

ベーゼッケやブリンクマンは一定の留保の姿勢を示した。しかし、こうした「評価には感情的要素が強く共鳴しており、時には歓びに満ちた歓迎もしくは頑強なまでの拒絶が、証明ないし反証に取って代わらざるを得ない」という嘆声が示すように、冷静な学問的議論を困難にするような特殊な状況下で、論争が繰り広げられたことを理解しておく必要がある。

ゲルマニストたちが「*deutsch*の起源」をめぐる議論を展開したのとほぼ同時期、歴史学者はそれと歩調を合わせるかのように「ドイツ・ライヒの成立」について激しい論争を繰り広げていた。それは、一九四〇～四五年というまさにドイツ民族にとっての運命的な時期と重なっているが、このことは決して単なる偶然ではない。今日の冷静な読者にとって、問題設定はもとより、*theuda*の種族的理解、そして個々の言葉遣いにいたるまで、ヴァイスゲルバーやフリングスの研究が同時代、すなわち第一次大戦の敗北、ナチズムと民族至上主義、そして第二次大戦という現実の政治状況・時代精神によって、いかに強く影響されていたか、それを見抜くことは実に容易である。

ただし、ゲルマニストの少なからぬ人々が、**theudisk*から*diutisk*への発展をともしれば単線的に理解したり、あるいはラテン語の展開を等閑視する傾向にあったのに対し、歴史学等の隣接分野の成果を積極的に摂取しつつ、*deutsch*の起源を、生成・死滅を運命づけられた三つの根源とその担い手のダイナミックな継起的・

複合的發展として説明するヴァイスゲルバーの構想が、そのスケールにおいて他に例を見ないほど壮大であることもまた事実である。⁽¹⁰⁾そして、戦後、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学を継承した「言語内容研究 (Sprachinhaltforschung)」を樹立し、長く多方面で活躍した学界の権威に対して、その所説を根底から覆す、あるいはそれに代わる新たな仮説を提示することが容易でなかったことは想像に難くない。⁽¹¹⁾

ただ、彼のテーゼが戦後も長らく通説として妥当しえた理由としてより重要なのは、やや逆説的であるが、大戦期における活況とは対照的な学界の停滞状況であろう。一九四五年の破局と国家の分断がもたらした「ドイツ民族」のアイデンティティの喪失という精神的雰囲気の中で、「*deutsch*の起源」という問題設定は、そのアクチュアリティを失い、また時にはタブー視すらされていた。それ故、ヴァイスゲルバー説は、一九七〇年代まで積極的に支持されたというよりは、むしろ本格的な学問的検証を加えられることのないまま放置されていた、と評価するほうが適切であろう。⁽¹²⁾

もつとも、歴史学の分野では、彼の所説の根底にある、共通の言語を絆とする民族意識形成という土台は、既にそれ以前から掘り崩されつつあった。例えば、しばし忘却に付されていたドーヴェの *gens* 論を戦後、再発見し、一九世紀以来のロマン主義的民族観を書き換えたヴェンスタスは、一九六五年に次のように警鐘を鳴らしていた。「言語共同体と民族共同体を同一視する考え方は、我々

の間(「ドイツ」)では、政治のみならず学問の領域でもごく普通におこなわれたし、また、あらゆる時代に妥当するものとして前提されきた。しかし、この見方は、初期中世については、近代の民族闘争の場合におけると同等の妥当性を主張しうるものではない。この認識は、我々の民族の形成を考えるうえで重大な帰結をもたらすものである⁽¹³⁾。エーヴィヒによれば、八世紀に形成途上にあつた言語境界線と、フランク王国のアウストラシア・ネウストリアを分かつ政治的境界線との間に直接的連関は認められず、また言語境界線がカロリング初期の民族意識に対して影響力も極めて限定されていた⁽¹⁴⁾。さらに、ヴァイスゲルバーに対し、「フランク人の土地占取」、北ガリアにおけるガロ・ローマ・ゲルマン両勢力の言語・民族闘争等々の材料を歴史学の立場から提供していたのは、「ボン学派」(シュタインバッハ、ペートリ)であつたが、近年の研究は彼らの成果の妥当性を、史料・方法論⁽¹⁵⁾、そしてイデオロギー的側面の双方において批判しつゝある⁽¹⁶⁾。

ゲルマニストの中では、一九七一年、ライフェンシュタインが、古高ドイツ語の音韻形 *-ni-* をもつ *duiskce* をザルツブルクの語義注釈に発見し、学界に一石を投じた⁽¹⁷⁾(二章一節)。そして、九世紀後半のバイエルンにおける古高ドイツ語の *duisk* の存在が間接的に立証されたとの前提から、第三の根源に関するヴァイスゲルバーの主張——これは他の二つに比べ、最も実証性の弱い部分であつた

——を疑問視した。すなわち、彼が、*dimisk* の成立地を西フランク語圏に隣接するモーゼル・マース川流域地方に求め、そこから東方へと「移動 (Wanderung)」⁽¹⁸⁾ することで、バイエルン、アレマニエンへとたらされたと説明したのに対し、ライフェンシュタインは、「移動」の想定の大必然性を否定し、西方の言語境界地域以外でも *dimisk* が自立的に存在しえた可能性を提示したのである。

この指摘は、その後シュトラッサーによって受け継がれ、尖鋭化していく⁽¹⁹⁾ (一九八四年)。ライフェンシュタインは一九七一年当時、ヴァイスゲルバーの唱える西フランク語起源説を基本的には承認していた。しかし、シュトラッサーは論文の前半部で、**theudisk*/*theudisk* の西フランク語起源の証とされた二重母音問題を取り上げ、*theudiscus* の *-eo-* は、ゲルマン語の音韻上の問題としてではなく、中世ラテン語の表記法上の問題に属するとの帰結を導き出した。シュトラッサーによれば、*-eu-* と *-eo-* は、中世の表記慣習において、ゲルマン語の音韻形をラテン語へと置き換える際に交替可能なヴァリエーションである。従って、二重母音を論拠に方言地理学上の特定をおこなうことは困難であり、*theudiscus* の語根は、理論的には西フランク語に限らず、西ゲルマン語であるならばいずれの方言からでも取り出した、というのである⁽²⁰⁾。

後半部では、ライフェンシュタインが提示した *dimisk* の自立性という仮説をかなり極端な形で拡大させた「東方説 (Osttheorie)」が展開される。シュトラッサーは、「俗語の *dimisk* が中世ラテン

語の *theudiscus* によって統御された」(ヴァイスゲルバー) との見方を否定し、*theudiscus* を西方からの「外来語 (Fremdwort)」⁽²¹⁾ *dimisk* をバイエルン＝上部ドイツ語圏地方において独自の発展を遂げた土着の「東方の語 (Ostwort)」と位置づける。つまり西フランク起源の **theudisk*/*theudiscus* と東フランクの *dimisk* の二系統の展開を想定し、後者が *deutsch* の直接の前段階であるというのである。そして、*dimisk* の発展は、ルートヴィヒ「ドイツ人王」(在位八三三―七六年) 統治下の東フランク王国の政治的発展、自立化 (＝「脱フランク化」) と結び付けられ、次の結論へといたる。「土着の東方の語 *dimisk* は、おそらくバイエルンで最初の確固たる特徴づけを与えられ、九世紀末の変革——念頭にあるのは八八七年のアルヌルフの国王登位 (引用者) ——を通じて固有辞へと向かう決定的刺激を受け、最終的には一〇世紀・一一世紀の交頃に初めて *deutsch* という語として完成したのである」⁽²²⁾。

前半部の実証的分析は、予想されるようにゲルマニストたちの支持を見出した⁽²³⁾。ただ、古高ドイツ語の二重母音 *-mi-* に関してあれほどまでに音韻法則を重視する彼らが、ラテン語の *-eo-* については、表記慣習の「許容範囲内」として片付けてしまうのには何か釈然としないものが残る。後半のかなり大胆な主張は、当然ながら歴史学者はもとよりゲルマニストからも厳しい批判を浴びせられた——僅かな数の用例に対する過剰解釈、*-mi-* を伴うラテン語形がバイエルン以外の東フランク語や古ザクセン語圏にも見出される事

実(二章一節)、東フランク王国の「脱フランク化」解釈の問題性、等々。⁽¹³⁾ **theudisk* と *theodiscus* の二重母音形の相違、九世紀後半に何故 *-mī-* を伴うラテン語形が古高ドイツ語圏・古ザクセン語圏で相次いで登場し始めるのか、音韻史上の疑問点は、今日もなお未解決の課題として残されている。⁽¹⁴⁾

四節 トーマス「カール大帝とイタリア」

ゲルマニステイクにおいてヴァイスゲルバー批判が開始された一九七〇年代、歴史学においても第二次世界大戦前後に激しく論じられた「ドイツ史の始まり」をめぐる議論が再燃した。その引き金となったのは、「前期中世におけるドイツ王国・国王概念の出現と普及」に関するミュラー・メルテンスの画期的研究の公刊であった(二章三節)。さらに、ブリュールは一九七二年、純粹に政治・国制史的観点からフランス・ドイツ両王国成立の同時並行性を唱え、その時期を旧来の常識に反して一一世紀初頭まで押し下げるといふ大胆なテーゼを発表し、学界に物議を醸した。⁽¹⁵⁾

これまで繰り返しその名を挙げてきたトーマスが、具体的な歴史事実⁽¹⁶⁾に力点を置きつつ、一つの見取り図を提示したのは一九八八年である。歴史学者として本格的な語形成論を展開したのは、実にドーヴェ、ローゼンシュトック以来であるが、その研究史上の位置を理解するためには、上記の七〇年代以降の潮流、すなわちそれまで自明の前提とされてきた「ドイツ」なる概念の再検討とそれに伴う

伝統的なドイツ史像の全面的書き換えへの動きが、強く作用していたことを承知しておく必要がある。

仮説bの立場から **theudisk* の存在を基本的に否定するトーマスは、論文を「*theodiscus* の起源」と銘打ち、このラテン語の初期の三例(七八六年、七八八年、八〇一年)を仮説の出発点に据える。そして、いずれも直接・間接にイタリアないしローマ教皇権と関連していることに着目し、その造語の動機を、フランク王権と教皇権の間の対等な関係構築という政治的文脈の中に探し求めていく。⁽¹⁷⁾

最初の七八六年の用例は、教皇使節のオステリア・アミアン司教ゲオルクが、教皇ハドリアヌス一世に宛てた、イングランドの教会会議に関する報告書簡中に見出される(本稿序章)。マールシアの教会会議の場で、先行するノーサンブリアの会議の決議が「ラテン語ならびに *theodisce* で (*tam latine quam theodisce*)」読み上げられたのであり、その目的は、「すべての人々がそれを理解することができる (*quo omnes intellegere potuissent*)」ことであった。第二の史料は、七八八年のタシロ裁判に関する『フランク王国編年誌』の記事である(一章二節)。一見イタリアとは無関係に思われるが、タシロは、七七四年にカールに屈服したランゴバルト国王デシデリウスの娘を妻としており、他方カールの権力の過度な強大化を危惧するハドリアヌスとも緊密な政治的利害で結ばれていた。そして、八〇一年の「イタリア勅令」は、その名が示す通り、皇帝がイタリアに向け布告したものであり、その中では、七八八年とま

ったく同じ法用語との関連で *theodiscus* が現れるのである。「余が *theodisca lingua* で *herisiz* と呼ぶところの」(同上)。それでは、ハドリアヌスは、七八六年以前のいつ、またいかなる機会に *theodiscus* というまだ目新しい術語を知ったのか。トーマスが「*theodiscus* の起源」を解明する糸口は、ここにある。

七七四年、ローマ。カールは、この時初めて永遠の都を訪れ、父ピピンが七五四年にキエルジーでおこなった教皇領寄進の約束を、聖ペテロ教会において、ハドリアヌスの眼前で更新し、誓約により確認した。主要史料である『教皇列伝 (*Liber Pontificalis*)』は、

この時列席したカール側の随行員の名前を一名しか明記していないが、イタリアの事情に精通したオステイアミアン司教の姿も当然見出されたはずである、とトーマスは推定する。そして、最初におこなわれた約定文の閲読・検証の場では、一二年後のマーシアと酷似した光景——「すべての人々がそれを理解することができる」ように、「ラテン語ならびに *theodisce* で読み上げられた」——が繰り返り広げられ、それに続くカールと世俗貴族による俗語での誓約と併せ、言語上の問題が生じたに相違ない、という——カールと世俗の側近たちが用いた俗語、すなわち「フランク語」を、ラテン語でどのように表記するのか?。

「*theodiscus* とは異なり純然たるラテン語に属する語彙で、それまでフランク語あるいは他の非ラテン語を指すために通常用いられてきたが、今やカールと彼のフランク人の随行者の言語を指すには

不適切と見なされてしまった」⁽¹⁴⁾、そのような表現としては、次の四つが考えられる。⁽¹⁵⁾ 一' *lingua vulgaris (vulgo, vulgariter)* 二' *lingua barbara (barbarice)* 三' *lingua francisca* なじし *lingua Francorum* 四' *lingua gentilis (gentiliter)*。最初の三者は、語源、(貶称的) 語義、政治的文脈といった種々の理由から斥けられ、最後の *gentilis* からの類推形成として *theodiscus* が造語された、とトーマスは結論づける。ただし、語義的には両者の間には決定的な相違があり、この点に *gentilis* の代替となる新たな語 (*theodiscus*) を探し求める必要が生じたというのである。

一章二節で紹介したように、*gentilis* という形容詞は、四・五世紀までは、ラテン語ないしギリシア語と対比される「民族の言葉」⁽¹⁶⁾ という語義と、教会ラテン語系統の転義「異教徒の」の双方を併せもっていたが、八世紀後半時はもっぱら後者の意味で使われていた。⁽¹⁷⁾ そのため、カールと彼に随行者するフランク人 (*gens Francorum*) の言語を *lingua gentilis*、つまり「異教徒の言葉」と呼ぶことは、もとより不可能であった。しかし、(政治的な意味での)「フォルク」を意味するその語根 *gens* は、俗語では *theoda* と等価の関係にあった。そこで、語形成上は俗語の *theoda* を基に、ただし意味内容的観点からすると上記の貶称の意味合いを排除した、そのような価値中立的な形容詞として *theodiscus* がカールの周辺で造られたという。やや込み入った関係を、前出ベッツの図式に即して描くならば、次のようになる。

「folk : gens + -ilis → gentilis : 「異教徒の」

=

≠

「folk : theoda + -iscus → theodiscus : 「folkの」

トーマスによれば、このように *theodiscus* の造語の動機は、ロマンス語とゲルマン・ドイツ語との間に繰り広げられたとされる言語・民族闘争、あるいはフランク帝国内のゲルマン語系諸言語集団の間の連帯を目指した皇帝の文化政策に発するものではない。むしろその契機は、「教皇権に対し、法的領域において対等の交渉相手として立ち向かうことを目指したカール大帝の努力」⁽¹⁰⁾ にあった。フランク側の視点に立ったその本来の語義は、「我々」⁽¹¹⁾「フランク人 (*gens Francorum*)」の「folkの言葉」だったのである。

さて、トーマス説の妥当性については、当然予想されるように、ゲルマニストから様々な批判が寄せられたが、いずれも造語論に関するものである。例えば、ハウブリクスは、ラテン語の単語 (*theodiscus*) が、借用語として受容されていないゲルマン・フランク語 (*theoda*) とラテン語の接尾辞 (*-iscus*) から直接造られるというのは、「同時代の語形成においては前代未聞」であるとして、これを斥ける。ライフェンシュタインもまた、もっぱらラテン語への借用に利用される目的のため、一個のゲルマン語 (*theodisk*) が創出されるというのは他に類例がないという⁽¹²⁾。

他方、トーマス説の強みは、現実に伝承されている初期の三点の史料証言に基づいて、言い換えると七八六年以前における俗語形容詞の存在を前提としなくとも、*theodiscus* 形成の経緯を一応説明することが可能であることを初めて示した点にあると言える。かつて仮説の急先鋒であったロマニストのレルヒは、確かにヴァイスゲルバー説に内在する矛盾点を鋭く批判したが、それに取って代わるだけの具体的な対案を提示することはできなかった。トーマスの研究では、あくまでも史料論にこだわる歴史学者の手法が、その力を発揮したと言えよう。

しかし、それが同時にまた、彼の所説の弱みであることもまた事実である。検討史料を最初期に限定し、それらを相互に結び付ける特定の政治状況を探求する試みは、その前提があまりにも具体的な歴史事実⁽¹³⁾に依拠しているが故に、新たな仮説の積み重ねを要請するからである。七七四年のローマにおけるゲオルクの滞在、タシロ裁判の政治的演出に込めた、教皇に対するカールの政治的思惑⁽¹⁴⁾ 等々の主張は、その蓋然性は高いものの、史料的には更なる裏付けを必要とする。また、最初期の用例に関する新史料が発見された場合——その可能性は極めて低いが——、トーマスが描き出す「*theodiscus* の起源」は、何らかの書き換えを余儀なくされるであろう。起源論、とりわけ一つの語の歴史的形を実証的に証明することの難しさがここにはある⁽¹⁵⁾。

しかしながら、こうした語形成に関するゲルマニストの批判や歴

史学上の難点にも拘わらず、筆者は、この所説の基本構想は二つの点で高く評価されて然るべきであると考える。一、何故 *lingua theodisca* という術語は、固有辞的な「フランク語」と、ゲルマン語系諸語を包括的に指称する「フォルクの言葉」という普通辞の双方をその射程に含めることができたのか——。この一見相反する史料所見を、前者の側に造語の動機を求めつつ整合的に説明する可能性を提示したこと。二、超民族的な「外」（＝イタリア）の世界との出会いを通じての他者認識の形成と、それに伴う自己理解の深化、という視点の重要性を前面に打ち出したこと。この見方は、民族名としての「ドイツ人」がイタリアにおける他称用法の逆輸入の所産であるとする、彼の後年の研究成果⁽¹⁸⁾とパラレルな関係に立つ。また、「deutschの起源」をあくまでもゲルマン＝フランク世界における民族的・言語的共属意識の覚醒という内的要因の中に求めようとする、旧来の思考枠組みとの決別を意味するものでもある⁽¹⁹⁾。そして、トーマスのこうした基本構想の背後には、ラテン語の単語 (*theodiscus/teutoniscus*) の展開が俗語 (*diutisk/diutsch*) のそれに対し語義、用法の両面において常に主導的役割を担っているという、ラテン語・俗語双方の膨大な関連史料を中世全般にわたり通観したうえで得られた重厚な認識が横たわっているのである。

五節 現況——「イタリア起源説」

一九九〇年代以降現在まで、学界はまったくオープンな状況に

ある⁽²⁰⁾。確たる定説が存在しないなか、ゲルマニストと歴史学者の双方が相次いで新たな可能性を提案するものの、しかしなお議論の出口は見えない。ただし、いずれの試みも、トーマス説の重要な論点の一部を取り出し、発展させるという方向性を示している。

ゲルマニストのリュールの見解は、仮説aとトーマス説の折衷案として位置づけられる（一九九四年）。*gentilis*と*theodiscus*との間に語形成上の連関を認める点ではトーマスと同様であるが、前者からの直接的な類推形成として後者の造語を説明せず、その間に中間項としての**thundisk*の介在を想定する点で異なる。すなわち、古高ドイツ語圏で知識人の手によって、ラテン語の「*gentilis* 異教徒の」を基に**thundisk*が新たに造られ、それがラテン語*theodiscus*へと借用されたが、その際、ラテン語形容詞は「*theoda* フォルク」から二重母音 *-eo* を受容した。また語義上も、*theoda* と語根を同じくする *githinti* や *-cadinu*（上述一節）——いずれも「フォルクの言葉（の）」の意——の影響下に、「フォルクの（言葉）」という新たな語義を得た、という⁽²¹⁾。図式化するならば、おおよそ次頁の図のようになる。

他のゲルマニストは、同じく仮説aを採るものの、**thendal*/**thendisk*を、知識人による新造語ではなく、ゲルマン語の相統語と見なしており、いずれも僅か一例しかない *githinti*, *-cadinu* と *theodiscus* の直接的関係に関する論証の弱さもあって、反応はおし

* *theoda* 二重母音 -eo

gentilis : *gens* + *-iis* || **thinda* + *-isk* ⇨ **thindisk* ⇨ *theodiscus*

「異教徒の」

→ 「フォルクの（言葉）」

gihinti, *-cadiuti*

「フォルクの言葉（の）」

なべて否定的である。^(註)

歴史学者の関心は、トーマス説のもう一つの論点、すなわち *theodiscus* とイタリアとの関連に向けられている。ヤルヌート（一九九六年）が着目したのは、北イタリアでは早くも九世紀初頭の時点で、アルプス以北のゲルマン語系住民を固有名詞に近い意味で総称する *theodiscus* の語法が現れている事実である（八一六年、ベルガモ：*Teutschis homines* / 八四五年、トリエント：*tan Teutiscum quam et Langobardi*）。^(註) そこから彼は、ラテン語形容詞がカール大帝期にフランク人によって初めてイタリアにもたらされたというトーマスの前提を疑問視する。^(註) ヤルヌートによれば、民族移動期、すなわち五世紀末のオドアケルの時代以来、イタリアには **thindis-* という語が既に存在していた。本来それは、かの地に相次いで侵入したゲルマン語系戦士団を指す自称概念であったが、フランク人の到来以前から既に、在地のイタリア人は、この語をラテン語化し他称として用いていた、というのである。

ヴォルフラムは、この推論をさらに展開させ、ヤルヌートの言う **thindisk* の由来を、例のゴート語の *þindisko* へと遡らせていく（一九九八年^(註)）。ゴート人、ランゴバルト人に集団的名辞を提供したのは、かのゴート語訳聖書であり、そのラテン語への借用によって *theodiscus* が造られたのではないかと。その傍証としては、イタリアにおける支配民族としてのゴート人、ランゴバルト人が信奉したアリウス派の伝統の存続や、ウルフィラのゴート語訳聖書の最重要写本（*Codex Argenteus*）が東ゴート国王テオドリックの周辺に由来することなどが挙げられる。しかし、ライフェンシュタインが指摘するように、ヴォルフラムは、教会ゴート語系の「異邦人の」から「フォルクの（言葉）」へと通じる語義変化の過程を説明してはいない。少なくとも史料として現実に伝承されている *theodiscus* の用例の中で、「異邦人の／異教徒の」を含意するものは皆無である^(註)（一章二節）。

これまで繰り返し確認してきたように、仮説 a に属するドーヴェ、あるいはリユール、ヴォルフラムの所説には共通する語義上の難点がある。ラテン語の *gentes*、もしくは **thendo* 系列の複数形名詞（例えば、ゴート語の *þindos*）、あるいはそこから派生した形容詞形 (*gentilis*/*þindisks*) にその起源を求めようとする限り、キリスト教的観点からの貶称的ニュアンスを排した *theodiscus* の語義は説明できない。この関係を成立させるためには、本来他称としてネガティブな含意で用いられた概念——「異教徒」——が、何らかの

事情により価値中立的内容に転じ、そう指称された側によって自稱として受け容れられる、そうした視点もしくは価値観の転換という事態を想定する必要がある。

第二の可能性は、価値中立的な、すなわち教会ラテン語系統の転義の影響を受けていない **thendo* 系列の単数形名詞から形容詞が派生し、それがラテン語へと借用されたというケースである。造語論上は最も自然な図式であり、ブラウネやヴァイスゲルバーの所説がその典型である。とりわけ、アルフレッドが用いた「*peod/ge-peode, peodisc* 言葉」は、語義上も *theodiscus/lingua theodisca* に直結している点が特に注目される。これに関しては、**thindisk* の原義を「異教徒の」に求めるリユールが、アルフレッドの「*peodisc* 言葉」を大陸から伝来した「*theodiscus* フォルクの(言葉)」の古英語化の産物として説明し、*peod/gepeode* = 「言葉」の語法も、あくまでも古英語に限定される例外的用法と捉えている。しかし、ライフェンシュタインによれば、リユールが提示した多数の古英語や古高ドイツ語の用例 (*in gihint, -cadinht*) からは、逆にゲルマン語 **thendo* = 「フォルク」からの派生語と「(フォルクの) 言葉」という転義との連関が「異論の余地なく確定されうる」という⁽¹⁴⁾。他方、トーマスがラテン語の単数形名詞 *gens* = 「フォルク」の価値中立的語義、ならびに *gens* と *theoda* の等価関係に着目し——**theodisk* の存在を前提することなく——、この難点を克服しようと試みたことは、既に詳述した通りである。

さて、そのライフェンシュタインは、これまでこの問題に関してトーマスと並んで最も積極的に発言してきたゲルマニストであるが、現在彼はどのように考えているのであろうか。それぞれ仮説 a ないし仮説 b の立場を取るライフェンシュタインとトーマスの見解は、一見鋭く対置しているように思われるが、両者は、*theodiscus* に先行する **thindisk* の存在を認めるか否かという一点を除けば、実は多くの共通点を有している⁽¹⁵⁾。ただ、ライフェンシュタインは、自ら具体的な語形成論を提示することはこれまでなかった。ところが、最新の論文「イタリアと *deutsch* の起源」(二〇〇〇年)では——**thindisk* が西ゲルマン語のいずれにおいても造語可能であったことを前提としながら——、イタリア政策との関連でカールの周辺で *theodiscus* が造語されたとのトーマス説を、注目すべきことにむしろ発展的に修正しようと試みているのである。「この語 (= *theodiscus*) は、フランクからイタリアへと移入されたのではなく、逆にそこでの語法から受容されたのであろう」。「逆に、カールの書記局役人がこの語をイタリアの地で、卑俗ラテン語の中に見出し、受容したとは考えられないだろうか?」⁽¹⁶⁾。これは、ヤルヌートに近い立場であるが、ライフェンシュタインは、より限定してランゴバルト語の中にその始まり (= **thindisk*) を探し求めている。約二〇〇年に及ぶ支配と法整備を通じて、「ランゴバルト人はイタリアで、在住民層の用いるラテン語(ロマンス語)と対比された自らの言語を表示する目的で、**thindisk* を用いることができたと思われる

る」。さらに、「ランゴバルト人が、『ロタリ王法典』以来、早期から成文法に基づく法整備に努めたことを考えるならば、歴史学者の議論において重要な役割を担っている。法用語で (rechtssprachlich)」、という語義も考えられる」。

もともと、七世紀の『ロタリ王法典』以降の種々の成文法の中に、**hindisk/theodiscus* は見出されない。ラテン語で記された法テキストにおいて俗語の法用語を注記する際には、*“id est”* という表記が一般的であった(例えば、*“feria, id est pulslah”*)。ランゴバルト語の史料は断片的にしか伝承されておらず、ここでもまた史料の壁が前に立ちはだかっている。現代イタリア語の *tedesco/tedeschi* の音韻形を示す *theodiscus* の異形 *todescus* は、『サレルノ年代記』(九七八年頃成立)に初出する。このラテン語は、はたしてライフェンシュタインの推定するように、七・八世紀のランゴバルト語にまで遡るのであろうか。⁽⁴⁸⁾

注

* 本稿(上)の注12で予告した論文集の翻訳は、二〇〇五年一月に刊行された。ハインツ・トーマス、三佐川亮宏・山田欣吾編訳『中世の「ドイツ」——カール大帝からルターまで』、創文社。本稿(下)では、邦訳の該当頁も併せて明記した。

- (38) Sonderegger, *Althochdeutsche Sprache* (注44), S. 14, S. 16.
- (84) Grimm (注29), bes. S. 7.
- (38) *Die gotische Bibel*, hg. v. W. Streitberg, Bd. 1, (Germanische Bibliothek, 3), Heidelberg 1910, 5. Aufl., 1965, S. 355. Krogmann

(注1), S. 「聖書訳文は、青野大潮訳『パウロ書簡』(新約聖書四)、岩波書店 一九九六年、一七四頁に拠る。ゴート語訳聖書については、さしあたり千種眞一『ゴート語の聖書』大学書林 一九八九年、を参照。

(86) A. Dove, Bemerkungen zur Geschichte des deutschen Volkstamens, in: *Sb. d. Bayer. Akad. d. Wiss., phil.-hist. Kl.*, 1893, S. 201-237. ND. in: ders., *Ausgewählte Schriftchen vornehmlich historischen Inhalts*, Leipzig 1898, S. 300-324, hier S. 319 mit Anm. 2. Vgl. ders., *Studien* (注26), S. 67ff. 拙稿『*Theudisk*』と *theodiscus*』——最初期の史料事例を中心に』、『北海道大学文学部紀要』四〇—二一九九二年、一三三—一四七頁、一章。本稿一章二節で紹介したように、民族の複数形が「(自らの民族以外の他の) 諸民族」(「非ユダヤ系」諸民族)「異邦人」へと転じていくプロセスが、ここでは既に生じていたことが確認される。なお、『ウルガータ』で *bindisko* に対応する語は、*gentilis* の副詞形 *gentiliter* である。新約聖書で *ethnos/gentiliter* が用いられたのは、当該箇所が唯一である。「マタイ」六、七には形容詞の名詞化形である *ethnos/ethnic* が見えるが、ゴート語訳では、期待される形容詞の対応形 *bindiskai* ではなく、名詞形 *bindo* を用いた意味的言い回しとなっている。Die gotische Bibel, S. 7. ゴート語訳聖書におけるそれ以外の *binda* の語法については、Herold, *Der Volksbegriff* (注20), S. 230f., S. 242 を参照。

- (87) King Alfred's Old English Version of Boethius de consolatione philosophiae, ed. by W. J. Sedgefield, Oxford 1899, cap. 19, S. 46. Krogmann (注1), S. 7f. 英訳文は King Alfred's Version of the Consolations of Boethius, done into modern English, with an Introduction, by W. J. Sedgefield, Oxford 1900, S. 47f. を参照。
- (88) King Alfred's Old English Version, cap. 18, S. 42; cap. 35, S. 99. King Alfred's Version of the Consolations of Boethius, S. 43f.

なお、Baesecke (注57), S. 328 が「一七二二の民族」と記しているのは誤解である。詳細は、A. Borst, *Der Turmbau von Babel. Geschichte der Meinungen über Ursprung und Vielfalt der Sprachen und Völker*, Bd 2,1, Stuttgart 1959, S. 544f. を参照。

(68) *King Alfred's Old English Version*, Metrum 10, S. 165. *King Alfred's Version of the Consolations of Boethius*, S. 193.

(69) Dove, *Bemerkungen*, S. 322ff. *さやちか長くなるが、次の有名な一節を引用しておく。*「教皇権がその遠き高みに立ちつつ、この地方の新たに引き寄せるべき諸部族の中に当初から——歴史的展開を先取りした形で——見て取っていたのは、単一の大ネーションの姿であった。七二二年から七三二年の間、三度にわたり、グレゴリウス二世と三世が、特使にして教会の創建者(ボニファティウス)に宛てた書簡——こうしたことは、カロリング時代には他に例を見ない——の中では、もっぱら *gens Germaniae* についで、*あたかもそれが一個のそして同一の theod* であるかの如く述べられている。他方、ボニファティウスの側では、ドイツの個々の *theoda* がそれぞれ固有の存在であるという現実を直視しつつ、繰り返し *gentes* と複数形で呼ぶか、あるいは *populi Germaniae, Germanice gentes* という言い回しを用いている。しかしながら同時に、彼がその思考において常に、それらを総体として把握していたのもまた事実である。そして、彼にとつて、自らに託されたこの伝道地の一体性を明確に表現するものとして、言語以外に何がありえたであろうか? フリースラントの岸辺からバイエルンの山脈にまで赴くなかで、ボニファティウスは、成熟した意識をもって、この言語が本質的には同一であることを初めて体得したのである。彼らをラテン語と向かい合わせることに、それこそが、伝道者・説教者にとつて最も肝心な仕事であった。その際、テューリンゲン語、シエヴァーベン語あるいはフランク語の差違は、彼にとつていかほどの意味があったであろうか? 彼が、教会の言葉(「ラテン語」で表された理念を翻訳しなければならなかったのは——(ボニファティ

ウスの母語である)ラテン語を引用するならば——、いつても同一の *gethede/theodisc* だったのである」(S. 322f.)。なお、七八六年の史料は「一八九五年に *MGH* に収録されたことば広く知られるものになった(注58)」。シューエは、その解釈は「一八九三年論文への補遺として同年刊行された。A. Dove, *Das älteste Zeugnis für den Namen Deutsch*, in: *Sb. d. Bayer. Akad. d. Wiss., phil.-hist. Kl.*, 1895, S. 223-235. ND. in: ders., *Ausgewählte Schriften* (注59), S. 324-333.

(61) Braune, *Althochdeutsch und Angelsächsisch* (注60), bes. S. 22-24. 引用文は S. 21.

(92) <ロルトは>古ノルド語に關して三例を挙げよう。Herold, *Der Volksbegriff* (注62), S. 234. Vgl. S. 240 Anm. 278.

(63) Otfrid, *Evangelienbuch* (注65), V. 8, v. 7-8, S. 229: *Thuz wir engil nennem, thaz heizent, so wir zellen, / bolon in gihinti fremkige luti* [我々が天使と呼ぶもの、それをフランク人は——我々が語るように——フォルクの言葉で (in *gihinti*) 使者と表す]。-*cadinti* にてついで、Braune, *Althochdeutsch und Angelsächsisch*, S. 26f. を参照。

(64) *Old English glosses*, ed. by A. S. Napier, (*Anecdota Oxoniensia. Mediaeval and Modern series*, 11), Oxford 1900, ND. *Hildegheim* 1969, 8, 350, S. 170. Krogmann, S. 8.

(95) ドーヴェ自身この矛盾に気付いてはいたが、それを解決することはできなかった。Dove, *Bemerkungen*, S. 323 Anm. 2. ドーヴェ流の伝道史的解釈は、近年シュェルナーによつても繰り返されている。E. Zöllner, *Bemerkungen zur Entstehung des deutschen Sprach- und Volksnamens aus der Sicht des Historikers*, in: *MIOG* 94, 1986, S. 433-437. *これら二つは、Reiffenstein, Theodiscus/diutisc* (注22) および Thomas, *Ursprung*, S. 330f. (Nachtrag). 邦訳、九四頁の批判を参照。

(96) 一九三六年にゲルマニストのクロクマンが公刊した小著(注

1) は、史料収集 (S. 7-40) と研究史の整理 (S. 41-74) に関して今日でもなお有益であるが、「*deutsch* の起源」を、誤解、に求めるその所説 (S. 75-108, bes. S. 102ff.) は、学界では全面的に否定されるか、無視された。クロークマンによれば、カール大帝統治初期 (七八六年以前) に、ゲルマン諸語に疎いアイルランド人か恐らくローマ人の聖職者が、古高ドイツ語の **theudisk* の普通辞的語義「フォルクの言葉の」を、「*germanisch* ゲルマン語の」と、誤解し、そのうえで *theudiscus* を造語した。この固有辞的語義は九世紀後半、今度は逆に古高ドイツ語 *diutisk* へと受け継がれ、その後政治情勢の影響の下、さらに「ドイツ (語) の」へと限定されるにいたった、というのである。批判としておぼろびあたり Weisgerber, *Theudisk* (注7), S. 117 および Neumann (後注104), S. 209f. を参照。ただ、筆者には、普通辞から固有辞への語義変化を、三つの語の間の迂回関係から説明するクロークマンの図式は、ローゼンシュトックの「フランク語」論 (後注109) とともに、次に紹介するヴァイスゲルバーの「三重の根源」という着想に何らかの示唆を与えたのではないかと思われる。

(97) Weisgerber, *Theudisk* (注7)。ヴァイスゲルバーは、一九四〇〜四五年の間に繰り広げられた論争において多数の論文を発表したが、同時にこの間彼は自説に次々に加筆修正を加え (例えば、ロマンズ語を指称し、**theudisk* と対置される **walhsisk* > *welsch* の導入)、最終的には総括的論文 *Die dreifache Wurzel des Begriffs Deutsch*, in: *Nachrichten d. Akad. d. Wiss. in Göttingen, phil.-hist. Kl.*, 1948, S. 1-7, ND, in: Eggers (Hg.), *Der Volksname* (注9), S. 357-367 と、著書 *Der Sinn des Wortes „Deutsch“*, Göttingen 1949 (いずれも一九四五年に執筆) において一つの到達点を見出した。しかし、相次ぐ変化は逆に論争に混乱を引き起こし、また全体像を理解しづらくしてしまったとも言える (関連論稿は、その後論文集 *Deutsch als Volksname. Ursprung und Bedeutung*, Stuttgart 1953 に収録された)。基本的に以下では、本来の構想を最も簡明直

裁に伝える *Theudisk* 論文の特に三章 (Die westliche Sprachgrenze im deutschen Schicksal, S. 142-154) と、Die dreifache Wurzel を用いることとする。なお、筆者は、習作ではあるものの、かつて彼の研究の概要と問題点について紹介・検討したことがある。「*Theudiscus*」の起源——L・ヴァイスゲルバーの所説の検討を中心に、『北大史学』三二、一九九一年、一一一六頁。その成果の一端は概説書にも取り上げられている。阿部謹也『物語ドイツの歴史』中公新書 一九九八年、三一五頁。

(98) Weisgerber, *Theudisk*, S. 106. Vgl. S. 147 Anm. 99.

(99) Ebd., S. 148.

(100) Weisgerber, *Die dreifache Wurzel*, S. 361.

(101) Weisgerber, *Die dreifache Wurzel*, S. 367 および ders., *Der Sinn*, 巻末の付図を簡略化して表した。

(102) Weisgerber, *Theudisk*, bes. S. 120ff., S. 134ff.

(103) Frings, *Das Wort Deutsch* (注29)。引用は S. 210, S. 224, S. 231。

(104) F. Neumann, *Wie entstand das Wort „deutsch“?*, in: *Zs. f. deutsche Bildung* 16, 1940, S. 201-221.

(105) Lerch, *Ursprung* (注27). Ders., *Frankreich* (注28).

(106) Baesecke (注27). Brinkmann (後注91).

(107) Specht (注45), S. 245. なお、中世史家カール・エルトマン (一八九八—一九四五年) は既に一九三五年、ナチスによる「ザクセン人の殺戮者」としてのカール像に對抗して刊行された論争書 *Karl der Große oder Charlemagne? Acht Antworten deutscher Geschichtsforscher*, Berlin 1935 の中で小論を著しつつは、(Der Name Deutsch, S. 94-105) ヴァイスゲルバー論争の経過を *Deutsches Archiv* 誌上の書評を的確に伝えていたことは、ほとんど知られていない。DA 5, 1942, S. 576f.; DA 6, 1943, S. 304f.; S. 624f. Vgl. P. E. Hübinger, DA 7, 1944, S. 331. ナチズムとの妥協を一貫して拒絶したが故にその犠牲者となったこの優れた研究者については、ペー

- トゲンによる詳細な追悼文の他、テレンバッハの回想録を参照されたい。F. Baethgen, in: C. Erdmann, *Forschungen zur politischen Ideenwelt des Frühmittelalters*, Berlin 1951, S. VIII-XXI. G. Tellenbach, *Aus erimter Zeitsgeschichte*, Freiburg i. Br. 1981, S. 82-94. ND. in: ders., *Ausgewählte Abhandlungen und Aufsätze*, Bd. 4, Stuttgart 1989, S. 1258-1264.
- (89) G. Tellenbach, *Königtum und Stämme in der Werdenzeit des Deutschen Reiches*, (Quellen und Studien zur Verfassungsgeschichte des Deutschen Reiches in Mittelalter und Neuzeit, 7-4), Weimar 1939 の公刊に端を発する論争の主要研究は、*Die Entstehung des Deutschen Reiches (Deutschland um 900)*. *Ausgewählte Aufsätze aus den Jahren 1928-1954*, hg. v. H. Kämpf, (Wege der Forschung, 1), Darmstadt 1956 に収録されている。Vgl. E. Hlawatschka, *Vom Frankenreich zur Formierung der europäischen Staaten- und Volkergemeinschaft 840-1046. Ein Studienbuch*, Darmstadt 1986, S. 193ff.
- (90) 時代精神を反映した言葉遣いの一例を、次の抑制の効いた優れた書評が列挙している。O. Deutschmann, Rezension zu: Weisgerber, *Der Sinn* (注67), in: *Zs. f. romanische Philologie* 67, 1951, S. 359-368, hier S. 360f., S. 365-367 次の皮肉混じりの書評文も参照：「ヴァイスゲルバー教授の著者における「deutsch」という語の」意味 (Sinn) の追求は、社会学、歴史学、語源論に関する各章の迷路を通りつつ、前キリスト教時代から現在にまでいたる。しかし、残念ながらそれが到達した成果は、「フランス人とドイツ人は過去の歴史においても現在も友人であるべきだ」との教訓を読者に伝えたことに尽きる」。E. Sobel, Rezension zu ebd., in: *The Germanic Review* 28, 1953, S. 72f, hier S. 72. の他、後注115、116の文献も参照——。ヴァイスゲルバー(一八九九—一九八五年)の追悼文の中では、言語学者としての理論形成にとって、彼の生まれ育ったロートリンゲンのメッツが当時置かれていた特殊な状況(普仏戦争による

ドイツ帝国への併合、二言語併用状況、独仏の敵対関係等々)が影響を及ぼしていたこの指摘が繰り返されている。W. Besch, in: *RhVjbl* 49, 1985, S. VIII. K. Repgen-K. H. Schmidt-H. Gipper et al., *In Memoriam Leo Weisgerber*, (Alma Mater, 62), Bonn 1986, S. 7, S. 13f. ヌマイスゲルバー説のキー概念「ロマンス語化されていないフランク人」も、実は彼の独創ではなく、ローゼンシュタットン (Rosenstock, *Unser Volksname* (注9), S. 43ff.) からの受容であるが、その理解のためには、こうした個人史的背景も踏まえておく必要がある。

- (91) それを可能としたのは、言語を自律的に作用する力 (energeia) と捉えるヌマイスゲルバーの「理想主義的・目的論的解釈」(H.-W. Eroms, Rezension zu: Eggers (Hg.), *Der Volksname* (注9), in: *Kritylos* 15, 1979, S. 185-188, hier S. 186) である。彼は、こうした広大な時空間を枠組みとする発展の背後に、それを通底する「内的規則性」、すなわち母語と言語共同体を通じて「ドイツ (Deutschum) なる理念の実現」(Die dreifache Wurzel, S. 358, S. 364, S. 366) について歴史的プロセスを見つけた。Vgl. ebd., S. 365: 「この語 (= deutsch) の由来をめぐる意見対立においては、語源に関する自説の正しさのみが問題となっていないのではなく、むしろ民族の生命を根本で支える諸力をいかに正しく理解するか、という点が争われているのである」。後注136の引用文も参照。ちなみに、「この論文がゲッティンゲンの学士院に提出された日付は、実に戦争最末期の一九四五年三月九日であった。母語と言語共同体という概念を基礎とするヴァイスゲルバーの言語観については、田中克彦『言語の思想——国家と民族のことば』日本放送出版協会、一九七五年、四四頁以下の詳述の他、生誕百周年記念のシンポジウムの論集を参照。 *Interpretation und Re-Interpretation. Aus Anlaß des 100. Geburtstages von Johann Leo Weisgerber (1899-1985)*, hg. v. K. D. Dutz, Münster 2000.
- (92) もっとも、ゼーによれば「言語内容研究」にしても、一九四一

年にヴァイスゲルバーが唱えた「種族固有の言語理論 (arteigene Sprachlehre)」の焼き直しにすぎないという。v. See (注19), S. 156.

(註) Vgl. W. Haubrichs, Einleitung, in: *Deutsch-Wort und Begriff* (註8), S. 7-11, hier S. 7f. Eggers (Hg.), *Der Volksname* (註9) に収録された一九点のうち、二点は一九四〇〜四五年に集中しており、戦後の研究はヴァイスゲルバーの補論(一九四九年)を除けば、「東方移動説」の修正を試みた Eggers, Nachlese (註10) の「補遺」と、*theodiscus* や *vulgars* の直訳借用語と解した Betz (註15) の二本を数えるのみである。この間の研究については、ちよあたの Ehrismann, *deota/diutisk* (註12), S. 297 が挙示された文献の 別' K. H. Roth, „*Deutsch*“. *Prolegomena zur neueren Wortgeschichte*, (Münchener Germanistische Beiträge, 18), München 1978, S. 347-392 の研究史の整理を参照。

(註) R. Wenskus, Die deutschen Stämme im Reiche Karls des Großen, in: *Karl der Große. Lebenswerk und Nachleben*, Bd. 1, hg. v. H. Beumann, Düsseldorf 1965, S. 178-219, hier S. 178f. Vgl. S. 206ff. ND. in: ders., *Ausgewählte Aufsätze zum frühen und preubischen Mittelalter*, hg. v. H. Patze, Sigmaringen 1986, S. 96-137, hier S. 96. Vgl. S. 124ff.

(註) E. Ewig, Volkstum und Volksbewußtsein im Frankenreich des 7. Jahrhunderts, in: *Caratteri del secolo VII in occidente*, (Settimane di studio del centro italiano di studi sull'alto medioevo, 5), Spoleto 1958, S. 587-648. ND. in: ders., *Spätantikes und fränkisches Gallien. Gesammelte Schriften (1952-1973)*, hg. v. H. Atsma, Bd. 1, (Francia, Beiheft 3-1), München 1976, S. 231-273, hier S. 270 mit Anm. 221, S. 272.

(註) ホン学派の特徴の一つである学際的研究は、多大な成果と方法的刺激をもたらしたが、少なくとも「*deutsch*の起源」に関しては問題を多々孕んでいる。ヴァイスゲルバーとプリングス、シユタ

インバッハとペートリ、双方の仮説を支える論拠は実は「相互引用カルテル」(プリュール)によって支えられたものであり、彼らの主張する「証明」は循環理論に陥っていた。Vgl. C. Brühl, *Deutschland-Frankreich. Die Geburt zweier Völker*, Köln/Wien 1990, S. 182-184 (引用句は S. 183)。また、特にペートリが唱えた「フランク人によるロワール川まで及ぶ地域の土地占取、ゲルマン系フランク人の後退線 (Rückzugslinie) としての言語境界線の形成」という主張(一九三七年)は、未熟な方法論と関連史料の恣意的解釈に基づく過大評価の産物であった。ペートリについては、未刊行史料を駆使した細密な評伝、および地名学者による再検証の成果を参照。K. Ditt, Die Kulturräumforschung zwischen Wissenschaft und Politik. Das Beispiel Franz Petri (1903-1993), in: *Westfälische Forschungen* 46, 1996, S. 73-176. M. Pitz, Franz Petris Habilitationsschrift in inhaltlich-methodischer und forschungsgeschichtlicher Perspektive, in: *Griff nach dem Westen* (後註四), Bd. 1, S. 225-246. 近年の研究は、地名学、言語学、考古学、歴史学等の多分野にわたって、学問的検証に耐えうる新たな方法論の構築に努めることなど、ローマン・フランク人面勢力の共生 (Symbiose) などの極めて複雑にして多様な諸相を、徐々に徐々に明らかに解明している。研究史の概観として、歴史学の側から、R. Kaiser, *Das römische Erbe und das Merowingereich*, (Enzyklopädie deutscher Geschichte, 26), 2. Aufl., München 1997, bes. S. 75-82 など、ヤン・ニーストーンの題名など、W. Haubrichs, *Germania submersa. Zu Fragen der Quantität und Dauer germanischer Siedlungsinsein im romanischen Lothringen und Südbelgien*, in: *Verborum amor. Studien zur Geschichte und Kunst der deutschen Sprache. Festschrift für Stefan Sonderegger zum 65. Geburtstag*, hg. v. H. Burger et al., Berlin/New York 1992, S. 633-666 を参照。

この他、田中目覚氏の『スウェーデン』刊行を準備している『RGA (Reallexikon der Germanischen Altertumskunde, 2. Aufl., Berlin/

- New York) の関連項目が有益である。例えば H. Fehr, Romanisch-Germanische Sprachgrenze, in: Bd. 25, 2003, S. 304-310.
- (10) 「ナチズムと歴史学」をめぐる最近年の研究は「ボン学派」を主たる担い手とする一九三〇年代以降の「西方研究」の「これまでほとんど知られていなかった陰の顔を次々に明るみに出してついでさ」あたり、次の二点の文献を参照。P. Schöttler, Die historische „Westforschung“ zwischen „Abwehrkampf“ und territorialer Offensive, in: *Geschichtsschreibung als Legitimationswissenschaft 1918-1945*, hg. v. dems., Frankfurt a. M. 1997, S. 204-261. 邦訳 P・シエトラー「歴史学の「西方研究」——「防衛闘争」と領土拡張のはざままで」同編 木谷勤他訳『ナチズムと歴史家たち』名古屋大学出版会 二〇〇一年、一五五—一九八頁(ヴァイスゲルバー 205 頁)。S. 205 Anm. 111—119(頁注 1—11)。*Griff nach dem Westen. Die „Westforschung“ der völkisch-nationalen Wissenschaften zum nordwesteuropäischen Ramm (1919-1960)*, hg. v. B. Dietz et al., 2 Bde., (Studien zur Geschichte und Kultur Nordwesteuropas, 6), Münster 2003. 同論集中でヴァイスゲルバーについては「ボン大学への招聘(一九四二年)をめぐる政治的背景および戦中・戦後の研究の連続性に関して言及されている。H.-P. Höpfer, Bonn als geistige Festung an der Westgrenze? Zur Rolle und Bedeutung der Westforschung an der Universität Bonn 1933-1945, in: Bd. 2, S. 673-687, hier S. 682-684. B.-A. Rusinek, Westforschung < Tradition nach 1945. Ein Versuch über Kontinuität, in: ebd., S. 1141-1201. 注 11 に挙げた記念論集の中ではクノープロックが「*ドイッチ*」という語の意味(およびその他の神話) (第四節の表題) について辛辣に論じている他「*レルヒエン*」ユラーが、戦時期の占領下ブルターニュにおける「特殊任務指導者」としてのヴァイスゲルバーの活動を詳らかにしている。Cl. Knobloch, Begriffspolitik und Wissenschaftsethik bei Leo Weisgerber, in: *Interpretation und Re-Interpretation*, S. 145-174, hier S. 157-161. J. Lerchemüller, Wissenschaft im Weltanschauungskrieg. Weisgerbers Arbeit in der besetzten Bretagne und die Wissenschaftspolitik der SS, S. 175-196. 434 H. Derks, *Deutsche Westforschung. Ideologie und Praxis im 20. Jahrhundert*, (Geschichtswissenschaft und Geschichtskultur im 20. Jahrhundert, 4), Leipzig 2001 44 学問的冷静さを欠く感情的議論に陥つてしまっていると思われる。
- (11) Reiffentein, *Diutisce* (406).
- (12) Weisgerber, *Der Sinn* (47), S. 80.
- (13) Strasser, *diutisk-deutsch* (49).
- (14) Ebd., S. 18-24, bes. S. 23. 古フランス語の *theis/Treidis* すなわちヴァイスゲルバーのフリンクスが西フランス語 **theudisk/theudisk* の古層を伝える最重要証拠として引き合いに出したこの語に關しては「*シトイランサ*」はその直接的証拠能力を斥けている。Ebd., S. 9-18. Vgl. Reiffenstein, 2, S. 2200. 西フランス語の実態について「ほとんど未解明の状況であるが、今日では一個の方言としての統一性自体、疑問視されている。Vgl. A. Quak, Art. *Franken*/2: Sprache, in: *RGÄ* 9, 1995, S. 374-381, hier S. 378.
- (15) Ebd., S. 24-54 (引用文は S. 54).
- (16) Vgl. Reiffenstein, 1, S. 1719f. Reiffenstein, *Glossen* (40), S. 80 mit Anm. 33. Haubrichs, *Rezenion* (49), S. 206.
- (17) Vgl. Reiffenstein, 2, S. 2197. Haubrichs, *Rezenion* (49), S. 206f. 九世紀後半—一〇・一一世紀の史料に現れる *theudiscus* と問題の *diutiscus* との間には「語義上の有意差は何ら認められない。九七七年に皇帝オットー二世がバイエルンのザルツブルク司教教会宛に発給した確認証書(原本)の中には「興味深いことには *diutisce* と *deutisce* (へ *theudisce*) の双方が同時に用いられている。MGH *DOH* 165, S. 185 Z. 40f., S186 Z. 20. シュトラッサーの主張を機械的に適用すれば、前者を「*ドイッチ*」、後者を「*フォルク*」の言葉」と解すればならぬことになる。なお、オットー三世の更な

る確認証書（九八四年）では、*diutisce* の表記に統一されている。MGH DdIII.1. S. 393 Z. 35f., S. 394 Z. 17f. Vgl. Brühl, *Deutschland-Frankreich* (注11), S. 199f. 歴史学からの批判として、この他にもトーマスの詳細な書評論文を参照。Thomas, *Theodiscus* (注8)。
なお、明言されていないものの、シメトラスサー論文には、『サルツブルク大編年誌』の九二〇年の項に見える「*regnum Teutonicorum*」がドイツ人の王国」という表記の同時代性を救おうとする意図が見え隠れする。拙稿『サルツブルク大編年誌』(注11)の五一頁を参照。

(124) ゲルマニストのティーフエンバッハは、ゲルマン語のラテン語への借用については、他の用例も含めた検証の必要性を指摘している。例えば、俗語がウムラウト変化によって既に長らく語形が変わっているにもかかわらず、そのラテン語化に際しては古い表記法が保持されることもあること、一例として中世ラテン語の *lendis* と古高ドイツ語の *liut* の関係を挙げている。H. Tiefenbach, *Rezensiön zu: Jakobs, Theudisk* (注15), in: *Beiträge zur Namenforschung* 35, 2002, S. 84-90, hier S. 87. この事例に即するならば、九世紀後半の *diutiscus* の出現を待たずとも、それ以前から史料上確認される *theudiscus* の背後に、既に古高ドイツ語の **thiutisk* の存在を推定することも可能となる。

(125) C. Brühl, *Die Anfänge der deutschen Geschichte*, (Sb. d. Wiss. Gesell. an d. J. W. Goethe-Uni. Frankfurt a. M., 10-5), Wiesbaden 1972. この刺激的論文は、後に大著 *Deutschland-Frankreich* (注15) に結実する。

(126) トーマスがこの問題と最初に取り組んだのは、一九七六年である。H. Thomas, *Regnum Teutonicorum = Diutiskono richi? Bemerkungen zur Doppelwahl des Jahres 919*, in: *RhVjbl* 40, 1976, S. 17-45. Rezension zu: Müller-Mertens, a. a. O., in: ebd., S. 280-282.

(127) 独自の仮説を提示してはいないものの、この間に「*deutsch* の

起源」を論じた研究としては、Erdmann (注107)、Jakobs (注40)、Zöllner (注5) の他に、次の論文が発表されている。G. Tellenbach, *Zur Geschichte des mittelalterlichen Germanenbegriffs*, in: *Jb. f. internationale Germanistik* 7, 1975, S. 145-165. ND. in: ders., *Ausgewählte Abhandlungen* (注10), Bd. 1, Stuttgart 1989, S. 319-339, bes. S. 158ff. bzw. S. 332ff. H. Fichtenau, „Barbarus“, „theodiscus“ und Karl der Grosse, in: *Lebendige Altertumswissenschaft. Festsache zur Vollendung des 70. Lebensjahres von Hermann Velters*, hg. v. M. Kandler et al. Wien 1985, S. 340-343.

(128) Thomas, *Ursprung*, S. 309-317. 邦訳「*theodiscus* の起源」七三—七九頁。

(129) Ebd., S. 316-326 (引用文は S. 316f.)。邦訳、八二—八九頁（八二頁）。

(130) 詳細については、注24、26に挙げた文献、および Thomas, *frenkisk*, S. 68 の補足を参照。邦訳「*frenkisk*——九世紀フランク王国における *theodiscus* と *teutonicus* の歴史について」九七頁。

(131) Thomas, *Ursprung*, S. 324. 邦訳、八八頁。

(132) Haubrichs, *Theodiscus*, (注11), S. 201. Vgl. ders., *die tiutsche und die andern zungen* (注11), S. 23f. mit Anm. 14, 16. Reiffenstein, 2, S. 2193. サルマニストの中でほとんど唯一の例外はリュールで、彼女は——**thiutisk* の先在という一点を除けば——*gens = theoda* からの *theodiscus* の造語をほぼ全面的に認めている。

Lühr, Johann Kaspar Zeub (後注8), bes. S. 101-105. また、ライフェンシュタインも、*theodiscus* とイタリヤの密接な関係については立場を同じくする。両者の見解については、五節で紹介する。

(133) この他、トーマスは、*theodiscus* の使用が期待される文脈で、この語が現れない場合、時に次のようなやや強引な論理を展開している。「……例えば「カールの伝記作者」アインハルトやランスのヒンクマルについて言えば、両者は、その語を知らなかったか、もしくは——この可能性のほうが高いのであるが——……その使用を

- 避けたのであった。Thomas, frenkisk, S91. 邦訳、一三四頁。参照 S. 71. 邦訳、一〇一頁。theodiscus の非使用という事実から、直ちに「彼らはこの語を知らなかった」という帰結を引き出すことは、とりわけ中世初期の史料の伝来状況を勘案するならば、極めて危険である。また、仮に知っていたとしても、その使用を避けた理由としては、ティーフエンバツハが指摘するように、ゲルマン語とラテン語から成る混種語 theodiscus に対する表現様式的観点からの留保」という可能性も併せて考慮すべきである。H. Tiefenbach, Rezension zu: Thomas, frenkisk, in: Beiträge zur Namenforschung 26, 1991, S. 462-464, hier S. 463.
- (131) トーマスの研究をいち早く取り上げたブリュール (Brühl, Deutschland-Frankreich (注11)) は、研究の全般的成果を認めつつも (S. 182 mit Anm. 6) 起源説については「なお極めて仮説的性格が強く」と慎重である (S. 186 Anm. 44)。ただし、「別の箇所では『少なくとも意義のある研究仮説としての地位を主張しよう』 (S. 204) とも述べていた。ローゼンシュトックを支持するヤークオプスの評価は、極めて肯定的である。Jakobs, Theudisk (注12), S. 12, S. 21f. mit Anm. 48, S. 63f.
- (132) H. Thomas, Die Deutschen (注12)。邦訳「ドイツ人と彼らの民族名の変容」一四五一—一八七頁。
- (133) Vgl. Weisgerber, Die dreifache Wurzel (注12), S. 366: 「Deutsch と同じ名辞は、ドイツの歴史に対して外部から付与された飾り (Anhängsel) などびななく、それはむしろドイツ民族の内部から成長したものであって、この名辞は、数世紀にわたる準備の成果であると同時に、ドイツ的なるもの (Deutschtum) の理念の実現のために、その力を及ぼし続けたのである」。
- (137) 試みにクルーゲ『語源辞典』(Fr. Kluge, Etymologisches Wörterbuch) の „deutsch“ の項目を引くと、ミツカ (W. Mitzka) 校訂の第二十版 (一九六七年) 第二十一版 (一九七三年) まではヴァイスゲルバー説に拠っているが、ゼーボルト (E. Seibold) 校訂の第二十二版 (一九八九年) では書名以外もはその痕跡は見出されない。なお、『グリム』の新校訂版 (一九七六年) では、ライフェンシュタインの見解も紹介されているものの、基本的にはまだヴァイスゲルバー説が踏襲されている。Grimm, Deutsches Wörterbuch, Neubearbeitung, Bd. 6, Lieferung 6, Leipzig 1976, Sp. 811.
- (138) R. Lüth, Das Wort „deutsch“ in seinen einheimischen sprachlichen Bezügen, in: Deutsch-Wort und Begriff (注8), S. 26-46, bes. S. 44f. リュールは、*thindisk/theodiscus の造語の動機として踏み込み、トーマス説の参照を求めつつも (S. 45)。なお、彼女の見解の概要は最初、R. Lüth, Johann Kaspar Zeuß, „Die Deutschen und die Nachbarstämme“ (1837). Zugleich ein Beitrag zur Diskussion über die Entstehung des Wortes deutsch, in: Erlanger Gedenkschrift für Johann Kaspar Zeuß, hg. v. B. Forssmann, (Erlanger Forschungen, Reihe A, 49), Erlangen 1989, S. 75-116 にあつて表明されていた。また、目下刊行中の『古高ドイツ語語源辞典』の „dintisc“ の項は、もともとリュールの所説に基づいて叙述された。E. Etymologisches Wörterbuch des Althochdeutschen, hg. v. A. L. Lloyd-R. Lüth-O. Springer, Bd. 2, Göttingen 1998, Sp. 699-706.
- (139) Reiffenstein, Italien (後注9), S. 27 Anm. 1. Reiffenstein, 2, S. 2196f. Haubrichs, Theodiscus (注9), S. 200 Anm. 4. Klein, Zum Alter (注9), S. 20 Anm. 34. Ehrismann, theodiscus/*thindisk (注26), S. 54f.
- (140) 史料と関連研究文献については、拙稿『ザルツブルク大編年誌』(四四頁以下を参照。ただし、この論文はヤルヌート論文(次注)の公刊以前に執筆されたものである(参照、五〇頁注一五))。
- (141) J. Jarnut, Teotischis homines (a. 816). Studien und Reflexionen über den ältesten (urkundlichen) Beleg des Begriffes „theodiscus“, in: MIOG 104, 1996, S. 26-40. ND. in: ders., Herrschaft und Ethnogenese im Frühmittelalter. Gesammelte Aufsätze.

Festgabe zum 60. Geburtstag, hg. v. M. Becher, Münster 2002, S. 51-65, bes. S. 63.

(142) H. Wolfrum, *Tirol, Bayern und die Entstehung des deutschen Volksbegriffs*, in: *Veröffentlichungen des Tiroler Landesmuseums Ferdinandum* 78, 1998, S. 115-129, bes. S. 118ff.

(143) Reiffenstein, *Italien* (後注14), S. 28f. 歴史学者には知られていない研究であるが、G. Must, *Die Entstehung des Wortes deutsch*, in: *Indogermanische Forschungen* 97, 1992, S. 103-121, bes. S. 107-110も、既にヴォルフラムに近い仮説を提示していた。彼は、ロー語の中に、前キリスト教時代に由来する世俗的語義「*fremd*」を見知らぬ、他の」を有する形容詞 **buidisk* が存在したと仮定し、それが五世紀にガリア南部、トゥールーズの西ゴート王国においてラテン語 *theodiscus* へと借用された想定する。すなわち、ゴート人が隣接するフランク人・ザクセン人、特に彼らの言語の呼称として用いた **buidisk* は、西ゴート王国内のローマ人によってラテン語化され徐々に普及していった。そして、この *theodiscus* の他称用法は、その後、西ゴートを駆逐したフランク人自身によって、自らの言語の呼称として受容されたというのである——。純然たる憶測に留まるのみならず、研究史も一九七〇年のエッガース編の論文集(注3)まですかフォローされていない。ゲルマニストの反応も冷淡である。Lühr, *Das Wort „deutsch“* (注88), S. 28 Anm. 9. Reiffenstein, *Italien*, S. 29 Anm. 8: 「無視して差し支えなす」.

(144) Lühr, *Das Wort „deutsch“*, S. 29, S. 31ff. S. 31-33には、「言葉」を意味する古英語の *peod* が二例、*geþeode* が一三例列挙されている。Reiffenstein, 2, S. 2196f. Vgl. Klein, *Zum Alter* (注46), S. 15f. ちなみに、「西フランク起源説」を主張するヴァイスゲルバーは、自説にとって都合なアルフレッドの語法を、ウルフィラの *buidisko* と同様あくまでも一回限りの例外的用法と見なし、その重要性を極力否定するものに努めていた。Weisgerber, *Theudisk*, S. 108 Anm. 8.

(145) ラテン語・俗語双方の史料への公正な配慮(本稿(上)一九頁) *theoda* と *gens* の対応関係(同二五頁)等々。特に第二の点について、両者は期せずしてほぼ同時期に同じ結論に到達していた。Reiffenstein, *Theodiscus/diutisc* (注22), S. 15. Thomas, *Ursprung*, S. 330f. (Nachtrag). 邦訳、九四頁。また、Reiffenstein, 1 は、トーマスの一九七六年の論文(注126)に言及するに留まっていたが、Reiffenstein, 2 では、この間に発表された彼の諸研究の成果が大幅に取り入れられている。

(146) I. Reiffenstein, *Italien und die Anfänge des Wortes deutsch*, in: *Sprache und Dichtung in Vorderösterreich*. Elsd. Schweiz, *Schwaben, Vorarlberg, Tirol. Ein Symposium für Achim Masser zum 65. Geburtstag*, hg. v. G. A. Plangg-E. Thurnher, (Schlern-Schriften, 310), Innsbruck 2000, S. 27-33, hier S. 29. Reiffenstein, 2, S. 2194.

(147) *Chronicon Salernitanum. A Critical Edition*, ed. by U. Weisgerber, (Acta universitatis Stockholmiensis, Studia Latina Stockholmiensia, 3), Stockholm 1956, cap. 38, S. 39. おこも「当該史料は、ランゴバルト人が当時既にロマンス語化していたことを伝えるものである。「ランゴバルト人は、かつて *lingua todesca* を語っていたが (*lingua todesca, quod olim Langobardi loquebantur*)」。Vgl. Reiffenstein, 2, S. 2192, S. 2200. イタリヤ語の *todesco* の歴史についての本格的研究は、筆者が知る限り、まだ発表されていない。V. Pisani, *Die italienischen Bezeichnungen für Deutschland und die Deutschen*, in: *Muttersprache* 72, 1962, S. 194-201 が概観を与えてくれるが、ダントテ以前の時代にはまったく立ち入っていない。なお、トーマスは、邦訳論文集に寄せた「まえがき」(二〇〇五年四月執筆)の中で、ライフェンシュタインの新解には言及していない。しかし、ヤルヌート説については、七八八年のタシロ裁判の場にランゴバルト人も参加していたことを指摘したうえで、次のように述べている。「いずれにしろ、私がラテン語

の形容詞 *theodiscus* を造りだす動機であったと想定したものは、ヤルヌートのテーゼを取り入れたとしても有効だと考えてよいでしょう」(一二頁)。

結びに代えて

以上概観した諸説は、いずれも史料の裏付けの薄弱さという点で、なお純然たる推測の域を出てはいない。その存在について直接立証できない語(**theudisk*)が議論の焦点に位置し、なおかつその語は理論上西ゲルマン語のいずれにおいても造語可能であったとされるため、逆に様々な推論を展開する可能性が増大してしまったとも言えよう。さらに、かつての「ゲルマン・イデオロギー」(ゼー)の桎梏から解放されたことも、こうした傾向に一層の拍車をかけているとも考えられる。

ただ、近年の研究を特徴づける共通の視点は、今後の研究の進むべき方向を明確に示唆しているように思われる。すなわち、ラテン語と対比されると同時に超民族的でもある *theodiscus/lingua theodisca* という包括的呼称の造語は、ある歴史的状況下において、対象に対し一定の距離を保った「外部」・「他者」の視点——民族移動、キリスト教伝道、フランク王権とローマ教皇権の対峙、等々——が確立されたことで初めて可能となったのであり、それ故この語を必要ならしめた言語史的・歴史的条件が問われねばならないので

ある。

今後も論争の推移を注視し続けていかねばならないことは当然である。⁽¹⁶⁾しかしながら、歴史学者の立場からすると、繰り返しになるが、「起源」の問題に深入りすることはおそらく得策ではないし、またその必然性も低いはずである。それは極めて魅力的な課題であるが、同時に定義の曖昧さとそれに付随する危険の故に、いきおい「起源の偶像」(M・ブロック)という陥穽に陥りやすい、と言わざるを得ない。*deutsch* という語の「起源や初期の歴史は、今後も決して、みんなに受け容れられるような解決策が、見出されることのない類の問題のうちに数えられる」⁽¹⁷⁾(トーマス)。そして、少なくとも *deutsch* という語それ自体ではなく、この語の歴史に反映された同時代人の意識の変遷を読み取ろうとする者にとっては、「*deutsch* の起源」を突き止めることは、畢竟二義的な意味しかもたないであろう。かつて、ヴァイスゲルバー説に対し冷静な批判を展開したプリンクマンが、この点に関して、既に次のように指摘していた。その引用をもって、拙い研究史の整理の締めくくりとしたい。

「この語〔*deutsch*〕の本来の運命は、あれこれ憶測・議論されている *deutsch* という語の初期の形態 (ゴート語 *þiudisks*、アングロ・サクソン語 *beodisc*、古高ドイツ語 *diutisk*) においてではなく、ラテン語の *theodiscus* において決定された。それ故、*theodiscus* の用例は、この語が辿った歴史の道程において最も重要な部分を構成しているのであって、この部分を説明することは、この名辞〔

「ドイツ」の形成史を解明することにもなるのである⁽¹⁴⁸⁾。

注

(148) 例えば、ティーフェンバッハは、ヤークオプスの著書への書評(注124)の中で、俗語のラテン語化の他、種々の興味深い論点(ウルフィラの再解釈、ラテン語・ギリシア語世界とゲルマン人の接触、**thendo*を語根とする他の形容詞形の検討)を指摘しているが、独自の説を提示するにはいたっていない。なお、つい先頃刊行されたばかりの「ゲープハルト」第一〇版では、トーマスの所説がほぼ全面的に取り込まれていることを付け加えておく。R. Schieffer, *Die Zeit des karolingischen Großreichs (714-887)*, (Gebhardt Handbuch der deutschen Geschichte, 10. Aufl., Bd. 2), Stuttgart 2005, S. 72f.

(149) Thomas, Ursprung, S. 295. 邦訳、五九頁。

(150) H. Brinkmann, *Theodiscus*. Ein Beitrag zur Frühgeschichte des Namens „Deutsch“, in: *Alldeutsches Wort* (H. 2), S. 20-45. ND. in: Eggers (Hg.), *Der Volksname* (H. 3), S. 183-208, hier S. 183.

〔付記〕本稿は、二〇〇四〜二〇〇五年度東海大学文学部・学部研究費による助成を受けた研究成果の一部である。

〔追記〕校正中に次の論文を入手した。M. Springer, *Italia docet. Bemerkungen zu den Wörtern franciscus, theodiscus und teutoniscus*, in: *Akkulturation. Probleme einer germanisch-romanischen Kultursynthese in Spätantike und frühem Mittelalter*, hg. v. D. Hägermann et al., (RGA, Erg.-Bd., 41), Berlin/New York 2004, S. 68-98. タイトルが示すように、シュプリンガーは、*theodiscus* とイタリアとの密接な関係を重視するが、自らも認める

ように新たな知見を提供してはいない (S. 69 Anm. 4)。*franciscus* と *theodiscus/teutoniscus* の両概念をもっぱら対立的に捉えるなど、首肯できない論点も多々ある。RGA Bd. 30に収録予定の „*Theodiscus*“ の項も同著者の執筆になるのであろうか。

Der Ursprung des Wortes „deutsch“ ——Ein Forschungsbericht (Teil 2)

Misagawa Akihiro

Im zweiten Teil des Forschungsberichtes geht es hauptsächlich um die Forschungsgeschichte des Wortes *deutsch* seit dem 19. Jahrhundert.

Jakob Grimm, der im Jahre 1840 mit dem „Exkurs über Germanisch und Deutsch“ den Grund für die weitere Forschung legte, bemühte sich darum, einen gemeingermanischen Gebrauch des Wortes **theudisk* nachzuweisen. Aber das got. Adverb *þiudisko*, das für Grimms gemeingermanische These einen der wichtigsten Quellenbelegen bietet, dennoch nur einmal im Ulfilas „Gotischen Bibel“ aus dem Ende des 4. Jh. bezeugt ist, erklärte der Historiker Alfred Dove als eine Ad-hoc-Bildung für eine gelehrte Übersetzungspraxis (1893). Dove suchte seinerseits im Umfeld der Bonifatius' Missionstätigkeit in der ersten Hälfte des 8. Jh. die Bildung des mlat. *theodiscus*, und entwickelte die angelsächsische Ursprungsthese, die später beim Germanist Wilhelm Braune Unterstützung und Ergänzung fand (1918).

Während die beiden Forscher nicht volkstümlichen, sondern gelehrt-kirchlichen Ursprung des Wortes annahmen, glaubte Leo Weisgerber, eine systematische These von den dreifachen Wurzeln des Wortes – westfr. **theudisk*, mlat. *theodiscus* und ahd. *diutisk* – vorlegen zu können, und zwar mit der stärkeren Betonung der Rolle der (Mutter-) Sprache und Sprachgemeinschaft für die „deutsche“ Volkswerdung (1940). Das westfr. Wort **theudisk* als der deutscher Sprachname sei, so Weisgerber, in den Sprachen- und Volkstumskampf im zweisprachigen Nordgallien des Frankenreichs um 700, als „ein Heimatruf der in dem Schicksal der Romanisierung stehenden Franken“ gebildet worden. Seine umfassend konzipierte, aber offenbar unter dem Einfluß des Zeitgeistes entstandene Lehre blieb, obwohl sie in den Quellen des Frühmittelalters kaum eine Bestätigung findet, etwa bis in die siebziger Jahre vorherrschend.

Im Jahre 1988 hat der Bonner Historiker Heinz Thomas versucht, den „Ursprung des Wortes *theodiscus*“, ohne die Existenz dessen volkssprachlichen Version vorauszusetzen, im Rahmen der Rompolitik Karls des Großen zu ermitteln: Bei der Erneuerung der Pippinischen Schenkung durch Karl in Rom 774 sei ein Sprachproblem für Bezeichnung der fränkischen Volkssprache aufgetaucht. Das mlat. Adjektiv sei dabei als eine Ersatzbildung auf der Basis *gens/theoda* geschaffen worden, um den pejorativen Gehalt von lat. *gentilis* (= heidnisch) zu vermeiden.

Zur Zeit beschäftigen sich die mehreren, namhaften Forscher (Jörg Jarnut, Herwig Wolfram und Ingo Reiffenstein) mit dem Suche nach dem Ursprung in Italien vor dem Anknunft der Franken im späten 8. Jh., entweder in der Sprache der Langobarden oder der Goten. Eine endgültige Lösung der Frage steht somit noch aus.